

「歌占」について

八 嶌 正 治

元雅の作品の中でも「歌占」の評価は実にまちまちである。中でも酷評の最たるものは佐成謙太郎氏の「謡曲大観」中の「概評」で、次の如きものである。

生き別れた父子の再会を主題としたものは、本曲の外に、「木賊」〔雲雀山〕〔弱法師〕〔花月〕などがあるが、その別離の悲哀は〔桜川〕〔隅田川〕〔三井寺〕などの母子関係に比べて、甚だ冷淡である。父子関係の曲でも、「木賊」などはその哀しみが可なり強く出ているが、本曲の如きは、子方の方は父を尋ねて歌占を引いてゐるが、シテ父の方は諸国を廻つてゐるのも、わが子を探ねる為ではなく、「一見の為」に過ぎない。主題についての描写がこのやうに稀薄である上に、舞台上の興味は歌占と地獄の曲舞に分れて、従つて一曲の中心的興味を失つてゐる。恐らく前項に挙げたやうな地獄の曲舞に創作の興味を感じて、これを主材として、親子の再会を主題とした世話物の一曲を脚色しようとした為に、創作の気分が不純となり、遂に失敗に終わったものと思はれる。

このような評価が先行した為か、謡曲選集でも取り上げられる事が少い。小学館の日本古典文学全集、新潮日本古典文学集成にも所収されていない。佐成評の要点は、主題は親子の再会でありながら、作者の興味を中心が地獄の曲舞にあり、次いで歌占にある為、一曲の中心的興味を失つてゐる所にあるとする。

この曲は、地獄の曲舞が先行している事は確かだが、ここで主題としている親子再会も決して蔑ろにしている訳ではない。むしろ他曲では単なる方便としている親子再会も、この曲では親子再会という主題と密接に関係しているのである。作品評価は評者によつて微妙に変化するが、他の評価も参考にしてみたい。

野上豊一郎氏の「謡曲全集」の前付では、「主題」として「狂乱して地獄の曲舞を舞はせるのが目的である。歌占を引かせたり、子供にめぐり会つたりするのは尾緒に過ぎない。狂乱の原因は神慮に逆らつた為である」とし、主題というよりは曲の目的を主に論述している。この見解は、「能楽全書・綜合改訂版」の能鑑賞篇も同一で、評価は「余節」の部分で、「この曲舞はかつて〔百万〕の中で舞われてい

たが〔五音〕、世阿弥は自作の〔クセ〕とさしかえ、元雅がこれを採り上げて、この曲舞を舞う人物として、頓死から蘇り、若い白髪という無気味な風体の男巫を設定して、本曲を作つたものと思われる」と専ら、創作目的に沿つた発言をしている。

西野春雄氏は、「日本古典文学大事典」で、「父子再会をもたらず歌占の実際、数奇な運命のシテにふさわしい曲舞の摂取、神氣の憑いた物狂い等、脚色が卓抜」と、評らしい発言を加えているが、最後の「脚色が卓抜」という評が、変つてゐるから卓抜なのか、主題・目的に沿つてゐるから卓抜なのか、少々明瞭さを欠く。何といつてもこの曲の本格的な取組みは、「日本古典文学大系」にある。「主題」の項目も要を得ていて「歌占の実際と、地獄めぐりの曲舞を見せる能。頓死からよみがえつて若いのに総白髪だという、無気味な風体の巫を演じ手としたのは、うまい手法である。父子の対面を筋だてに用いている」としているが、今迄の紹介と本質部分は変りなく、「歌占の実際と、地獄めぐりの曲舞とを見せる能」としている。

歌占の部分の面白味は、まずワキが歌占を引くと「北は黄に南は青く東白、西紅にそめいろの山」と出る。シテは、「これは父のことをおん尋ね候ふか」ときくと、「さん候ふ親を待ち候ふが、所勞仕り候ふ間、生死の境を尋ね申し候」と答える。判じた結果、シテは、「まことに命期の路なれども、また蘇命路に却来して、ふたたびここに蘇生の寿命の、種と

なるべき歌占の言葉、頼もしく思しめされ候へ」と答えるが、これは、今、危篤の状態で確かに寿命は尽きかかっているが、再び生き返つて寿命を長らえることになるであらうの意である。これはシテ本人の、

ある時俄かに頓死しぬ、また三日と申すに蘇える、それよりかやうに白髪となりて候、という紹介と何と似ている事か。といつて、シテが子方に成り代わつて、子方の父の事を占つてゐる訳ではないのである。ツレは「今日まかり出で占を引かせばやと思ひ候」と言い、子方に、「わたり候ふか、歌占のおん望みのよし承り候おん供申さうするにて候」と声をかける。前々から子方の親探しの事は聞いていたが、ツレの占いは飽く迄ツレの父の事なのである。子方の引いた短冊には「鶯の卵の中のほととぎす、しやが父に似てしやが父に似ず」と書かれてゐる。鶯の字音はアウで、「逢ふ」という語に縁があり、その上、邂逅に縁のある卵たまごという言葉も歌われている。シテは「これははや逢ひたる占にて候」という。子方は訝しがるが、シテの、「時も卯月程時も合ひに合ひたり、や、今鳴くはほととぎすにて候ふか」という言葉も実に機微を得て美しい。そう言えばツレの方の判の、「金銀碧瑠璃、ばぎう迦宝の影、五重色空の雲に映る、されば須弥の影映るによつて、南瞻部洲の草木縁なるといへり、さてこそ南は青しとは詠みたれ」、これも綺羅を撒いたように美しい。要するに前半は生命讃歌と親子相会う喜びを画いてゐるのである。

頓死からの蘇りと親子相会う喜びと後半の地獄の曲舞とは相反するものなのである。まず元雅が地獄の曲舞を見た時こうした生命讃歌の着想を得たという事は注目に価する。地獄の曲舞は大きく二節に分かれる。中程にある「死に苦しみを受け重ね、業に悲しみ、なほ添ふる」迄が前節であり、主題は人生の無常を詠つており、後半は地獄めぐりであるが、次第と同じ、「月の夕べの浮き雲は、後の世の迷ひなるべし」で結ばれてゐる。この句は夕暮の月に浮雲のかかる有様は、人間後世の迷いの根源を象徴してゐるのだの意にとれる。

その後は元雅の創作で、「後の世の、闇はなにとか照らすらん。胸の鏡よ、心濁すな、心濁すな」とあり、次いで立回り（流派によりカケリにもする）を舞うが一種の不安感の表出を目的としてゐる。たゞこの「心濁すな」と結びつくと、「月の夕べの浮き雲」は、夫れを思う事によつても後世成仏を願うべきだの意となるようである。次第の否定精神からクセ末の肯定精神への転化が想定される。

一生はただ夢のごとし、たれか百年の齢を期せん、万事は皆空し、いづれか常住の思ひをなさん。命は水上の泡、風に従つてめぐるがごとし、魂は籠中の鳥の、開くを待ちて去るに同じ、消ゆるものはふたたび見えず、去るものは重ねて来らず。

たゞ無常を説くだけでなく、「魂は籠中の鳥の、開くを待ちて去るに同じ」といつた立体性にこのクセの良さはある。「朝長」に「魂は善所におもむけども、魄は修羅道に残つて、し

ばしくるしみをうくる世」とあるように、魂は迷路に行き陽で、魄は地上に留る陰であるというのは、この当時の辞書類に多く記され、一般化した概念であつた。元雅もこの句には一目置いたに相違ない。

最初の歌占の仏説に譬えた美しきや蘇生、親子再会という創作は、クセの無常観や地獄廻りと対をなすものとして考えられたのではないかと思われる。「しかれどもかたがた名残の一曲に、現なき有様見せ申さん」、最末で我が子を連れて帰るのに「かたがた」とは矛盾しているが、そこにこの曲の眼目があつたと思われる。曲舞を狂い、神懸かりを設定する事によつて逆に前半の明るさを創作し、人間存在の根源と不可思議さに迫る能を創作したのではなかつたか。導機を異にするが「卒都婆小町」の人間矛盾表出と似る。

元雅の精神は意外に明るく健全であつて、暗い南北朝期の地獄の曲舞に、一つの意味を与え、人間性の多様性を示すものにしたのであつて、（歌占いの実際と、地獄めぐりの曲舞だけを見せる能）という規定は当らないのではないか。私はいつも舞台を見る事によつて人間性の深い所に迄つれて行かれるのである。

（引用本文は日本古典文学大系本による）  
〈元宮内庁書陵部図書調査員〉

猶、地獄の曲舞についての考察史は、日本古典文学大系〔歌占〕補注二二二、松岡心平『地獄の曲舞』典拠考―貞慶消息・曾我物語との関連をめぐつて〔観世〕昭和55年4月〕に辿れる。